因果応報的ストーリーへの期待とその発達

— 幼児期・学童期に注目して —

○山手秋穂¹・橋瀬和秀²

(¹九州大学大学院人間環境学府・²九州大学人間環境学研究院)

キーワード：幼児，道徳性，推論

Children's Expectation for "Inga-Oho" Ending

Akiho YAMATE¹ and Kazuhide HASHIYA²

(¹Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu Univ., ²Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu Univ.)

Key Words: child, morality, reasoning

目 的

「善いことをすれば良いことが起こり，悪いことをすれば悪いことが起こる」とする「因果応報」の信念は，日常場面でも多く見られる。たとえば，「日頃の行いがよかったから宝くじに当選した」と言ったり，「悪いことをしたからばちが当たった」という表現を使ったりする。悪事と不幸を結びつける考え方が，年齢の低い子どもにおいて多く見られたことから，当初は因果関係を推論する能力が未熟なために起こると考えられていた (Piaget, 1932) が，このような考え方は因果推論の能力が備わっている大学生においても依然として見られたことが示されている (渡辺, 1990 ; Raman & Winer, 2004)。先行研究では，「因果応報」の期待がいつごろから見られるものなのかはまだ明らかになっていない。本研究では，結末を選択できる物語を用いて，登場人物の行動に応じて「因果応報」となる結末が期待されるかどうか，また，成人・5歳児・小学生を対象とすることで，その期待がどのように発達するのかを検討した。

方 法

被験者：成人 48 名（男性 19 名， $M=23.48$ 歳， $SD=7.56$ ）5歳児 29 名（男児 14 名， $M=62.38$ ヶ月， $SD=4.89$ ），小学生（1，2，3 年生）24 名（男児 10 名， $M=8.19$ 歳， $SD=10.68$ ）

手続き：物語の場面をイラストにした A6 サイズのカード計 6 枚を，ナレーションを交えながら 1 枚ずつ提示した。物語の最後に，従属変数として，物語の結末 (Happy End/Unhappy End) を被験者に選んでもらい (図 1)，その理由を質問した。独立変数として，「主人公の行為」(善い/悪い；それぞれ Good 条件/Bad 条件)，「物語中に起こる出来事」(良い/悪い；それぞれ Lucky 条件/Unlucky 条件) を設定した。Good/Bad 条件では，主人公の行為が偶然良い/悪い結果に結びついたのではなく，意図的になされたことが分かるような教示をした（「面倒だから手伝わない」など）。Lucky/Unlucky 条件では，Good/Bad 条件との差別化を図るために，主人公が行動を起こした結果としてではなく，まったくの偶然により良い/悪いことが起こったことが分かるような教示をした（「木の下を歩いていたらおいしそうなりんごが落ちてきた」など）。

被験者 1 人につき 4 条件を提示した。被験者が 5 歳児・小学生の場合は，物語の内容の理解および記憶がなされているかを確認するため，4 つ目の物語の結末を選んでもらった後に，物語の内容について質問する内容確認質問も併せて行った。

結 果

各条件で，Happy End を選択した人数と Unhappy End を選択した人数の間に偏りがあるかを検討するため，二項検定を

図 1. 物語の一例 (Good 条件)

行った。

成人：Good 条件と Lucky 条件では Happy End が有意に多く選ばれ，Bad 条件では Unhappy End が有意に多く選ばれた ($ps < .01$)。

5歳児：どの条件においても Happy End が有意に多く選ばれた (Lucky 条件のみ $p < .05$ ，その他 3 条件は $p < .01$)。

小学生：Good 条件と Lucky 条件でのみ Happy End が有意に多く選ばれた ($p < .01$)。

また，各条件において，年齢が結末選択の仕方に影響を及ぼすかどうかを検討するために，5歳児と小学生のデータをを用いてロジスティック回帰分析を行った。独立変数は年齢，従属変数は選択した結末 (1=Happy End, 0=Unhappy End) とした。その結果，Bad 条件において，年齢の上昇が結末選択の仕方に有意な効果をもたらした ($\beta = -.93$ $z = -3.88$, $p < .001$)。

考 察

Bad 条件では年齢が上がると Happy End より Unhappy End が選ばれるようになり，「因果応報」の期待がなされるようになることが示唆された。「因果応報」，特に「悪いことをすれば悪いことが起こる」とする「悪因悪果」の期待は，発達によって得られるものであることが推察された。

引用文献

- Piaget, J. (1932). *The moral judgment of the child*. London: Routledge, Kegan, Paul & Co.
- Raman, L., & Winer, G. A. (2004). Evidence of more immanent justice responding in adults than children: A challenge to traditional developmental theories. *British Journal of Developmental Psychology*, 22, 255-274.
- 渡辺弥生 (1990). 因果応報の信念に関する発達的研究. *Tsukuba Psychological Research*, 12, 151-157.